決して死ぬのではない、たゞ彼れ等の永き夜を通して、靜かに眠つて居る、而してそれは冬と呼ぶのである。うら〳〵霞む暖かな日が來て、野にも山にも朝の榮光を浴びせるやうになつたならば、彼等は、幸福な靜かな永い眠りから醒めて、再び新らしい美しい生々した春を飾るのである。かくして春、夏、秋、冬、とこしなへに變ることなく、大いなる神の攝理の下に繰りかへされて、花も、鳥も、我も、汝も、すべてのものが安らかに生活を營むのであると。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

子供は、お母さんの教訓を聞いて、ながい間の疑問を解くことが出來、幼稚園へ通ふやうになつては、先生から色々の道理を說き聞かされて、日は一日、成長するに隨つて賢い人になるのである

が、その始めは、母なる人のやさしい說話を待たねばならないのである。

フレーベル會俳句端書集

一、課題　當季雜吟一人十句以下
一、締切　九月二十五日限り
一、披露　十一月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には景品を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす、
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村
フレベル會俳句掛
鹽野奇零宛

第十四回俳句端書集

藪寺や木魚叩けば蚊のわめく　東京　辰子
蓮提て鳥居潛らぬ女かな　仝
澁團扇鼾の顏にのせてあり　仝

朝貞や庭一面に藕ふかき　川越　歸迷
宿直の部屋を蚊やりの西詩吟　仝
船借りて月に漕ぎ出す納涼哉　長野　曉霞
掬ぶ手に木影つめたし岩清水　仝
寐覺よき田面十里や青嵐　仙臺　一瓢
靈祭る火の燃え跡や五戸の村　仝
夕立のあとの片帆や與謝の海　仝
朝貞や紺屋の知らぬ色もあり　神戸　學洋
水草も葉裏を見せる暑さかな　仝
短夜や枕に波の幾かへり　東京　ゆかり子
見かへれば人の妻なり夏柳　仝
將軍が戰死の野邊や轡虫　大分　春月
破垣に零徐子得たり小三合　仝
初秋や港につきし露の使ひ　武藏　だるま
晒井や老の力の健やかに　駿河　樂水

弦齋の喰道樂や初茄子　大坂　きよ女
涼しげな水の流れや夏神樂　仝
行軍や松原幾里蟬の聲　佐世保　柳月
七夕や陣所〳〵の物がたり　在滿州　孤聲
雲散て夕日に殘る暑さかな　仝
戸をしめて愚痴を言ひけり初嵐　仝
盆踊元祿風の結び髪　秩父　尹人
汲上ぐる水紫や萩の花　仝
余所の子に先づ取られたり青瓢　仝
虫啼くや忍びの客の戻りたる　仝
秋の空我にやましき心なく　栃木　閑山

三　光

天　夏痩や敗將軍の目のくぼみ　埼玉　帶水
地　陣中の今宵懷かし星明り　仙臺　一瓢
人　初秋や神馬を洗ふ五十鈴川　大分　春月

追加　無一庵奇零

澁團扇昔堅氣の主人かな
夏深し砲臺のあと草生ひて
汗拭きつ互に避暑の話かな
夕納涼燈明臺の微白き
夕涼し音樂堂に耳洗ふ

短歌募集

▲課題、隨意▲締切、毎月末日、▲發表、本誌上
▲賞品、三光に粗景▲撰評、眞宮起雲
▲投稿　用紙隨意左記の處に送らるべし
伊勢國河藝郡稻生村　みどり短歌會
○當撰發表
(天)古今歌文書綱要一部　京都櫻井　芳野君
(地)雪月花一部　伊勢白浪　子君
(人)作歌自在一部　紀伊千仗喜美子君

短歌

起雲選

(天)　京都　櫻井　芳野
やせ〳〵て世を憤ほる我ともと見れば興ある夏菊の花

(地)　伊勢　白浪　子
朝風にあはれ露ちる白蓮の清きをうたに此世終へんか

(人)　紀伊　千仗喜美子
ぬけ落ちし黒髪詩集にそと祕めてそゝろ心地に秋の雨きく

◎　小林　波香
夕雲に思ひこらせて痩せし身のふくれ髪寒し初秋の風
ほろ〳〵と木犀かをる築山に匂ひこめたる夕月のかげ